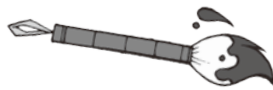


新・下野市風土記

新しい展示



下野市教育委員会 文化財課

今回は、5月にリニューアルオープンを予定している、しもつけ風土記の丘資料館の新しい展示についてお知らせします。

展示のこれまで

しもつけ風土記の丘資料館は、県南地域の史跡を紹介するため、昭和61年に栃木県が設置したものです（広報しもつけ令和2年4月号と6月号参照）。

資料館設置計画が持ち上がった頃、県内では、東北縦貫自動車道や新4号国道の建設、1万人プールで有名な真岡市の井頭公園の造成などに伴う大規模な発掘調査や、下野国分尼寺跡、下野国府跡の発見に伴う学術調査のほか、多くの古墳の調査が行われました。

当時、大規模な開発に伴う発掘調査がいたるところで実施されました。関東地方だけでも、多摩ニュータウンや成田国際空港などで発掘調査が行われ、多くの遺跡が、調査後に姿を消し

ました。

しもつけ風土記の丘資料館が建設されたのは、壬生町立歴史民俗資料館や小山市立博物館、下野国府跡や下野薬師寺跡のガイダンス施設が設置されるより前のこと。当時は、壬生町、上三川町、宇都宮市南部から、現在の下野市、小山市北部に至る地域の古墳から出土した埴輪や武器、馬具を一手に展示していました。また、下野薬師寺跡や下野国分寺跡、下野国府跡から出土した瓦や土器類、同時代の庶民の暮らしを知る手がかりとなる、薬師寺南遺跡から出土した土器類も展示していました。

現在、これらのモノを中心とした展示は、県内各地から出土した資料を収蔵する栃木県埋蔵文化財センターが充実しています。

しもつけ風土記の丘資料館のこれから

今回の資料館のリニューアルでは、しもつけ風土記の丘資料館が設置されたときのコンセプトに立ち返り、下野市の周辺地域が、県内・関東地区・日本の歴史とどのように関わり、どのような役割を果たしていたのかに焦点を当てることにしました。

そのため、下野市域が歴史上、重要な役割を果たした時代であり、国・県を代表する遺跡が多く残され、県や市の歴史を語る際に複合的につながっていることを証明する時代である、弥生時代の終わり頃から平安時代頃までの展示内容を充実させました。

九州や西日本では、弥生時代の終わりから古墳時代の始まりにかけて、吉野ヶ里遺跡に代表される堀、土塁、逆茂木、望楼など、戦いから守るために工夫されたムラの跡が見つかっています。邪馬台国であった可能性が指摘される奈良県桜井市纏向遺跡のような、後の時代の都市に類似した大規模な村落もつくられました。

では、栃木県やその周辺地域はどうだったのでしょうか？ この地域の、同時代のムラは、どのようになっていたのでしょうか？

歴史の教科書では、弥生時代になると大陸から稲作が伝わって全国でほぼ同時に米が作られるようになり、収穫に石包丁が使われたと記されていますが、現在のところ、栃木県では石包丁は1点も出土しておらず、北関東全体でも数点しか出土していません。しかし、福島県以北では、一定の量が出土しています。どうしてこのようなことが起きたのでしょうか？

古墳時代は、クニを代表する王や首長のために造られた前方後円墳の出現により始まりますが、下野市の周辺や栃木県でも、そうだったのでしょうか？ だとしたら、三王山南塚古墳や大田原市の上侍・下侍塚古墳などの前方後方墳と前方後円墳には、どのような関係が？ 約350年間にわたって、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳など、様々なかたちの古墳が造られています。その違いは？

埴輪はなぜ造られ、どのような役割を持っていたのか？ なぜ、人だけでなく、馬や武器や機織りなど、色々な形のもの造られたのか？

こうした数々の謎について、結論は出ないかもしれませんが、皆で考えてみることを目的とした展示を目指しました。どうぞお楽しみに。